

## 若者はどのように文学に感動するか —日本人大学生の文学的感動の喚起要因と反応についての 探索的研究(I)

How Are Young People Moved by Literature? An Exploratory Study on  
Japanese University Students' Eliciting Factors of and Responses to  
Being Moved by Literary Works (I)

野中 進\*、趙 丹寧\*\*

NONAKA, Susumu, ZHAO, Danning

近年、経験的アプローチに基づいた実証的な文学研究が世界的に注目されている。本論では、文学作品を読んで得られる感動について、1) 読者の反応、および2) 感動の喚起要因（作品側、読者側）を検討した。34名の日本人大学生を対象にアンケート調査を行い、彼らが文学作品に深い感動をしたときにどのような反応を示しているか、作品のどのような要素（内容面、表現面）に感動し、どのような読書習慣を持つかについて調査した。

本調査で明らかになったのは、1) 読者の反応について、胸の熱さ、喉の詰まりや涙といった実生活の感動と似た反応が最も多く挙げられている一方、心のざわつき、不眠、溜息といったネガティブな反応も多かった。このことは、実生活の感動に比べて文学の感動がネガティブな要素をより多く含む可能性を示唆する。2) 感動の喚起要因については、作品側の要素として、「愛情」や「日常の脆弱さ」「不幸な境遇でも幸せになれること」などの内容が感動を喚起しやすいこと、「新鮮味」（異化）や「複数の価値観のぶつかり合い」（対話）などの表現手法が感動体験と強く結びついていることが示された。全体として、家族愛という「身近な主題」と謎や伏線を含む「ミステリー的面白さ」の結びつきが好まれる傾向がある。このような作品内容と表現手法の結びつきが読者の「自分自身に引きつけた読み」を誘い、感動を喚起しやすくなることも推測できる。一方、読者側の要素としては、読書の頻度が感動の喚起しやすさと必ずしもつながらないことが示された。

キーワード：文学、感動、日本人、大学生、経験的アプローチ

\* のなか・すすむ 埼玉大学 教養学部教授，ロシア文学、文学理論

\*\* ちょう・たんねい 埼玉大学 国際本部 留学相談員，カウンセリング心理学、感情心理学、文化心理学

## 1. はじめに

### 1.1 文学研究の経験的アプローチと感動

近年、さまざまな経験的アプローチに基づいた実証的な文学研究が注目されている。Don Kuiken や David Miall を中心とするカナダのアルバータ大学の研究チームはとくに「文学作品を読むこと」、つまり受容に関する経験的研究を進めてきた (Miall, 2006 ; Kuiken, Miall, & Sikora, 2004)。また、Fialho (2019) は、学校や会社などで実験参加者にいくつかの文学作品を読ませた後、自己や世界の理解深化といった自己変革 (transformation) の効果が得られることを示唆している。

本論では、このような世界的な研究動向を踏まえ、文学研究と心理学の学際的研究を通じて、文学作品の受容についての実証的研究を目指す。その際、われわれが着目するのは「感動 (Being moved)」という現象である。

感動とは感情の一種であり、一般的には「深く物に感じて心を動かすこと」(広辞苑第6版, 2008)、「美しい行為・話・芸術作品を見たり聞いたりして、人間の理想に触れた感じがして、充足感を覚えること」(新明解国語辞典第4版, 1991)とされる。心理学においては、感動は一種の愛着関連感情 (attachment-related emotion) であり、集団への帰属や他者とのつながりといった人間の基本的な動機とされる (Koelsch et al., 2015)。そのため、感動は人類の進化過程で重要な役割を果たしてきたと考えられる。感動は芸術との関連性も深く、審美的畏怖 (aesthetic awe)、スリル・戦慄 (thrills, chills) と並んで美学の三大要素 (aesthetic trinity) と見なされる (Konečni, 2005; 2011)。芸術の感動は崇高 (the sublime) の概念と深く関わり、絶頂体験 (peak life experience) として人間の記憶に残ると言われる (Gabrielsson, 2001)。言語芸術としての文学について言えば、感動は読者の心を揺さぶり、深く記憶に残り、その人の生き方の確立に寄与しうる。こうした観点から、文学受容における感動の研究は、学術的にも社会的にも意義があると言えよう。

しかし、文学受容における感動についての実証研究は、現時点ではまだ少ない。心理学側からの研究がいくつかある。例えば Djikic et al. (2009) は、小説への感動が大学生たちのパーソナリティを変えることを実験によって示した。Wassiliwizky and Menninghaus (2022) は詩による感動と表現手法の関係についての実証研究を行った。

さらに芸術の感動と実生活の出来事による感動との違いについて言えば、Menninghaus et al. (2015) は芸術、実生活、メディア報道における感動を比較し、芸術の感動では実生活・メディア報道のそれより悲しみの要素がより強いと指摘した。これに関連して、Menninghaus, Wagner, Hanich et al. (2017) は Distancing-Embracing model を提案し、芸術受容とネガティブな要素の関係を説明した。それによれば、芸術作品の受容者 (読者、観客) には「作品のネガティブな要素と距離を置く (distancing)」および「作品のネガティブな要素を受容する (embracing)」という二つの心理的メカニズムが働く。第一の「距離を置く (distancing)」メカニズムとは、作品が実生活でないため、受容者は自身の安全 (personal safety) を感じつつ、作品を読み続ける／観続ける

か否かの選択権を持っていることを意識する心理である。その心理によって受容者は安心感とコントロール感を得、ゆえに作品のネガティブな要素（出来事や感情）を積極的に受容する（positively embracing）という第二のメカニズムが働き、受容者は作品に感動できる。このモデルは、なぜ我々が芸術に快感を求めるのに、作中のネガティブな要素を好んで鑑賞するかという逆説（Hume, 1757）を説明している。

こうした研究成果に基づき、文学研究と心理学の方法を組み合わせ、文学作品を読んで得られる感動（以下「文学的感動」）について以下の研究を行うことが我々の目標である。

- 1) 文学的感動とはどのような現象か。具体的には、①文学作品を読んで感動するとき、読者にはどのような反応が起きているか、②どのような要因が読者の感動を喚起するのか、③以上は実生活の出来事による感動とどのような違いがあるか。
- 2) 文学的感動は読者にどのような影響を与えるか（たとえば自己理解や世界把握などに関して）。

本論ではその第一歩として、日本人大学生を対象に、上記1)に関する探索的研究を行う。なお、2)については別稿に譲る。

## 1.2 文学的感動における読者の反応と感動の喚起要因

文学作品に感動する際の読者の反応について、感動の先行研究を参考にできる。先行研究では、感動は基本的にポジティブな感情価とされる（Seibt et al., 2018）が、その中には様々なポジティブ感情（喜びなど）とネガティブ感情（悲しみなど）が混在する（Kuehnast et al., 2014）。また、感動は一種の道徳的感情としても捉えられる（Landmann et al., 2019）。身体的反応としては、涙を流す（Schere, Zentner, & Schacht, 2002）、鳥肌が立つ（Benedek & Kaernbach, 2011）、胸が熱くなり心臓がどきどきする、喉が詰まる（Cova & Deonna, 2014）などが指摘されている。ただし、以上の知見は実生活や芸術など様々な感動から得られたものであり、文学的感動に焦点を当てた場合、どのような反応が得られるかを本論で検討したい。

文学的感動の喚起要因については、作品側と読者側それぞれの要因から検討することが必要である。

作品側の要因としては、作品の内容（主題）と表現（手法）という二つの側面が重要である。とくに内容（主題）については、実生活で感動した出来事との関連性を検討すべきだと考えられる。実生活の感動に関する先行研究では、親子愛や友情といった人間関係、誕生・死・離別などのライフイベント、達成などの出来事が報告されている（Cova & Deonna, 2014 ; Landmann et al., 2019 ; Menninghaus et al., 2015）。また、これらの出来事の特徴としては、自分が深く関わる出来事ないし共感する出来事（戸梶, 2010）、社会規範・道徳観念・自己理想に合致する出来事（Menninghaus et al., 2015）、個人の力では及ばない出来事（加藤・村田, 2013 ; Menninghaus et al., 2015 ; Tan, 2009）などとされる。文学的感動の内容（主題）的要素が実生活の出来事による感動とどのような共通点と相違点を持つか、本論で検討したい。

文学的感動の表現（手法）的要素については、従来の文学理論に依拠しつつ検討することが可能である。文学研究における経験的アプローチの意義を考えるに当たり、20世紀に蓄積された文学理論についても再検討すべきである。たしかに Miall (2006) が批判したように、20世紀の文学研究は全体として見れば理論偏重気味だったかもしれない。しかしその間、文学作品の表現面、とくに手法や構造に関する重要な概念が生み出されたことも事実である。そのなかでとくに着目される概念はロシア・フォルマリズムの「異化 (ostranenie, defamiliarization)」(Shklovsky, 1990) とミハイル・バフチンの「対話 (dialogue)」(Bakhtin, 1981)である。これらの概念は文学作品と読者の関係性のモデル構築に役立つところが大きいと思われる (Miall & Kuiken, 1994)。

「異化」とは文字通り「不思議なものにすること」を意味する (野中, 2022, p. 140)。日常生活において見慣れた事物を別の角度や方法で表現する芸術原理であり、一般的表現としては「違和感」や「新鮮味」が相応すると考えられるので、本論の調査ではこの二つの言葉で質問を行う。一方、「対話」とは人間主観の複数性を重視し、複数の価値観＝「声」が一点に集約することなく終わりなき対話を続けるという人間関係性のモデルである (野中, 2022, p. 151)。一般的表現としては「複数の価値観のぶつかり合い」に相応すると考えられるので、本論の調査ではこの言葉で質問を行う。

他には、言語表現における比喩（とくにメタファーとメトニミーの二大比喩）についての研究成果 (Jakobson, 1990) も重要である。心理学の実証研究では、韻 (rhyme)、頭韻 (alliteration)、韻律 (meter) などの並列性 (parallelistic features) が詩をより感動的に感じさせることが示されている (Menninghaus, Wagner, Wassiliwizky et al., 2017)。

本論では、上記の文学理論が、実際の読者の文学的感動を説明できているかも検討したい。

それに加え、読者側の要因も検討する。読者側の要因としては年齢や性別、読書習慣などが考えられるが、本論ではとくに読書習慣に注目する。

### 1.3 研究目的

以上の議論を踏まえて、本論の研究目的は以下のようなようになる。

目的1：日本人大学生が文学作品に感動するときに、どのような反応を示すか。

目的2：日本人大学生の文学的感動を喚起する要因は何か。

## 2. 方法

### 2.1 手続きと調査対象

2022年6月から7月にかけて、関東にある国立大学で、大学生の読書に関する調査を行った。本調査は、埼玉大学の倫理審査委員会の承認を得て実施された (承認番号 R4-E-3)。

調査は学部1、2年生の文学入門の講義、および学部3年生から大学院博士前期課程2年生までの文学理論の講義において、ワークシートの記入によって行われた。著者は事前に受講生に研

究概要・目的・所要時間の目安、および参加しないことにより不利益が生じないこと、プライバシー保護の措置が取られることを説明し、参加者の承諾を得た上でワークシートを記入してもらった。

34名の参加者から回答を得、有効回答は34名であった。内訳として、男子学生12名、女子学生21名、性別不明1名であった。参加者の平均年齢は19.2歳であり、標準偏差は1.50である。

## 2.2 ワークシートの構成

ワークシートの構成は以下の通りである。

**該当作品の基本情報** 参加者が深く感動した文学作品の題名、作者名、作品を読んだ時期と場所を尋ねた。

**感動時の反応およびその後の読み返し回数** 感動したときの身体的反応と持続時間を尋ねた。また、その後何回その作品を読み返したかを尋ねた。

**感動の喚起要因1（作品側）** 作品に感動した理由、感動した箇所の内容について自由記述を求めた。また、感動した箇所の表現について、自由記述以外に、選択肢による質問も行った。

**感動の喚起要因2（読者側）** 参加者の年齢、性別、読書習慣を尋ねた。読書習慣については、小学校、中学校、高校と現在における日常の読書頻度と愛読するジャンルを尋ねた。

## 3. 結果と考察

調査結果は、「3.1 該当作品の基本情報」「3.2 感動時の反応およびその後の読み返し回数」「3.3 感動の喚起要因」に分けて、述べていきたい。

自由記述の内容については、著者1と著者2の合議により分類を行った。その後、分類について大学院生1名が独自に確認し、相違がある場合には著者2と再度合議を行い、最終的な分類を確定した。

### 3.1 該当作品の基本情報

回答者たちが深く感動したという文学作品は、合計31作品挙げられた。3作品（うち1作品は留学生が挙げたものである）を除いて、すべて日本の作家の作品であった。また、挙げられた日本の作家のうち、第二次世界大戦以前に創作活動を行ったのは2人（梶井基次郎、宮沢賢治）のみであった。ジャンルの的には大半が小説だったが、児童文学や童話的作品、短歌集も少数ながらあった。全体として、大学生の文学的関心が日本文学、とくに現代日本文学に集中しており、彼らの文学の知識や関心が限定的であることがうかがえる。

作品を読んだ時期については、最も多いのは高校（35.3%）であり、次は中学校と大学（それぞれ23.5%）であり、小学校は17.6%であった。すなわち、8割以上が思春期である。この点はエリクソンの発達段階理論（Erikson, 1959）が参考になる。エリクソンの理論によれば、12歳か

ら 20 歳までの課題は、個人のアイデンティティの形成である。この課題に失敗すると「同一性拡散」の状態となり、社会での活躍が困難になる。中学校から大学 1、2 年はまさにこの時期であり、学生たちは<自分>という存在をどう確立するか悩み、模索していることが見られた。

作品を読んだ場所については、自宅がほとんど (85.3%) であり、次は学校 (11.8%) であった。文学作品に感動するためには、自宅のような寛げる環境が必要かもしれない。

### 3.2 感動時の反応およびその後の読み返し回数

文学作品に感動したとき、どのような身体的反応が生じたか (複数回答可) という質問に対しては、胸の熱さ (35.3%) と喉のつまり (35.3%) が最も多く、次いで涙 (29.4%)、「淡い温かさ」 (29.4%) であった。これらは前述した先行研究 (Scherer et al., 2002 ; Benedek & Kaernbach, 2011 ; Cova & Deonna, 2014) と一致している。一方、心のざわつき (2.9%)、不眠 (2.9%)、溜息 (2.9%) なども挙げられた。これらは本調査で初めて示された結果である。この結果については、文学的感動は多くの場合、<sup>フィクション</sup>虚構の物語に起因するため、実生活の感動よりもネガティブな要素を許容しやすいことが考えられる。これは 1.1 で言及した Menninghaus et al. (2015)、Menninghaus, Wagner, Hanich et al. (2017) の知見とも一致する。

喚起された感動はどのくらいの時間続いたかという質問に対しては、1 日から数日が最も多く (38.2%)、次いで 1 時間から数時間 (32.4%)、読んだ時のみ (20.6%) であった。その一方、1 か月以上続く (5%) という長い持続期間の回答もあった。全体に、実生活の感動 (趙, 2023) より持続時間が長い傾向にある。

感動後、作品を何回読み返したかという質問に対しては、2 回から 3 回が最も多く (52.9%)、次は 0 回 (26.5%) であった。だが、数年おきに読み返す (20.6%) という回答も少ない数字ではない。

### 3.3 感動の喚起要因

感動の喚起要因の分析に当たっては、「3.3.1 作品の全体的特徴」では回答者たちが挙げた作品の全体的特徴を論じる。その上で、「3.3.2 感動的な部分の内容」と「3.3.3 感動的な部分の表現」で、回答者たちがとくに感動した部分にフォーカスし、感動の作品側の喚起要因をさらに詳しく見る。最後に、「3.3.4 参加者の読書習慣」で感動の読者側の喚起要因を検討する。

#### 3.3.1 作品の全体的特徴

作品に感動した理由についての自由記述の内容は、4つのカテゴリーに分類された：「作品の主題・内容」、「作品の表現・手法」、「自分の境遇や願望との合致」、「その他」。



Table 1 作品に感動した理由

カテゴリー	サブカテゴリー	度数	%
作品の主題・内容	愛情	7	21.2
	人間の弱さ・悲痛さと日常の脆弱さ	5	15.2
	自己犠牲	3	9.1
	成長	3	9.1
	人生はじつは普通ではない	2	6.1
	主人公の生き様	2	6.1
	<i>overall</i>		22
作品の表現・手法	伏線・謎が最後につながった	2	6.1
	対比	2	6.1
	過去の回顧を所々に入れる	1	3.0
	日常の印象的な描写	1	3.0
	<i>overall</i>		6
自分の境遇や期待との合致	自分と似たような境遇	2	6.1
	自分らしく生きてよいこと	2	6.1
	人生の目標に向けて頑張ること	1	3.0
	<i>overall</i>		5
その他		1	3.0
	総数	33	100.0

**作品の主題・内容** 感動した理由のうち、「作品の主題・内容」カテゴリーの回答が最も多く、全体の6割以上を占めた。とくに「愛情」の主題・内容に関する回答が多かった。なかでも家族愛を主題にした作品が多い。おもに現代文学の作品である（『人魚の眠る家』と『そして、バトンは渡された』は複数回答）。近代文学では、梶井基次郎の短編『過古』が挙げられているが、これも遠くに住む家族への愛を主題にした作品である。全体に、家族を主題にした作品への関心が高いと言える。この結果は、実生活での感動的な出来事において、家族など重要な人間関係が最も多いという知見（Menninghaus, 2015；趙, 2023）と一致している。

「人間の弱さ・悲痛さと日常の脆さ」に関わる回答も多かった。その際、SF やミステリー調の非日常的筋立ての作品が多く挙げられている（『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』、『虐殺器官』など）。異常な境遇に置かれた主人公の苦悩、日常生活の脆さに読者の関心が集まっている。これに関連して、「人生はじつは普通ではない」というサブカテゴリーもある。「“普通の人”という考え方が覆された気がして、衝撃を受けた」（『コンビニ人間』）；「今の平和な日常は先人たちの努力と死体の上に築き上げられているものであると気付かされたから」（『永遠の0』）という回答であった。以上の二カテゴリーを合わせると、人間の弱さ、日常生活ないし人生の脆さ・儚さを描く作品に、読者が感動しやすいことが推察される。これは、実人生における感動がしばしば「人間の力では及ばないことに対して生じる」という認知を伴うという先行研究（加藤・村田, 2013；Menninghaus et al., 2015；Tan, 2009）とも合致する。

感動した主題・内容のサブカテゴリーには「自己犠牲」もある。臓器提供を素材にした作品（『人魚の眠る家』）や自分の残り少ない命を他人のために使う筋立ての作品（『名のないシシャ』、『三日間の幸福』）が挙げられている。これは、感動は利他的な感情であるという知見（Cova & Deonna, 2013；Landmann et al., 2018）と合致する。

「成長」に関する回答も同数あった。作品例としては、人種問題や格差問題について母と息子がともに考え、偏見につながる考え方を乗り越えていく設定の作品（『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』）がある。これとやや関連があるのは「主人公の生き様」というサブカテゴリーであり、「自分の欲望のためなら手段を選ばないという悪女」という設定の主人公について「実行力がある点においては、ある意味かっこいいなと思った」（『白夜行』）という回答があった。思春期の読者にとって、成長や生き方が重要な関心事であることがあらためて示された。

**作品の表現・手法** 感動した理由のうち、「作品の表現・手法」は「作品の主題・内容」に次いで多く、全体の2割近くある。目立ったのは、「伏線・謎」の手法に関する回答であった。「タイトルにこめられた意味が分かったときに、それまでの内容が頭の中でつながって、気持ちよかったから」（『そして、バトンは渡された』）；「命の価値や幸福について考えさせられたことと、終盤にかけて題名などの伏線回収に驚き、余韻が残ったから」（『三日間の幸福』）；「全てがつながる快感」（『かがみの孤城』）。これらの回答に共通するのは、題名を含め作中に仕掛けられたさまざまな伏線の意味が最後に明らかになる「伏線回収」の手法が、主題・内容に関する感動を増していることである。

「対比」の手法に関する回答も同数あった。「一見すると、真反対のことを述べているように見えるのに、深く共感できるから」（『サラダ記念日』）、「言葉にできないような切なさや悲しさの反面、温かさを感じたから、大切な人の死という不条理に向き合った時、自分ならどうするか考えるきっかけになった」（『銀河鉄道の夜』）。これに関連して、「過去の回顧を所々に入れる」という時間的構成に着目した回答もあった：「彼女の記憶をたどるうちに、主人公と彼女の忘れられていた過去があきらかになる、という内容だけでなく、途中途中で過去の描写を入れる構成がより感動を大きくした」（『僕は君に10年分の『 』を伝えたい』）。以上の回答例は、表現上の工夫が主題・内容に関する感動に結びつくことの気づきを示している。

「日常の印象的な描写」を感動要因として挙げる回答も1例ある：「作品を通して何か重大な事件があった訳ではないが、日常のささいなことが丁寧に切り取られていたのと、全体的に静かな中で人々の動きや関係性の変化が伝わってくるから」（『密やかな結晶』）。ただしこの作品は、人間の大切なものが国家権力によって奪われていく島を舞台とするディストピア文学であり、やはり非日常的設定の作品の人気の高さを示している。

**自分の境遇や願望との合致** 感動した理由のうち、「自分の境遇や願望との合致」は前述した「表現・手法」と同数で、全体の2割近くある。文学的感動は、作品そのものだけでなく、読者が自分の人生と重ね合わせて読むことによっても喚起されることがうかがえる。

まず「自分らしく生きてよい」という回答がある。自分の性格が周りと合わず、人間関係に悩む読者は、他者と合わなくても幸せになれるという作品の主題に励まされるのだろう。また、「自分と似たような境遇」を挙げる回答もあった。主人公の年齢や境遇が近いことで、身近なテーマ



となり、共感しやすいことがうかがえる。作品から自身の人生の目標を得て、頑張る原動力となったという回答もあった。

このように、感動は個々人の境遇・期待と深く関連することが示された。文学的感動も、自己と深く関連することに喚起されやすい（戸梶，2010）と言えるだろう。

以上、回答者たちが感動した作品の全体的特徴を見てきたが、次節では、作中の感動的な部分にフォーカスし、より詳しく感動の喚起要因を見ていこう。

### 3.3.2 感動的な部分の内容

感動した作品のうち、とくに感動した部分の内容についての自由回答は以下のように分類される。

Table 2 感動的な部分の内容

カテゴリー	度数	%
愛情	11	32.4
不幸な境遇でも幸せになれること	7	20.6
主人公の個性・人生観	6	17.6
喪失感とその回復	4	11.8
成長・再会	3	8.8
スリル・戦慄的な内容	3	8.8
総数	34	100.0

感動的な部分の内容は、作品の主題と同じく「愛情」のカテゴリーが首位を占める。挙げられた例の大半は親子の愛情であった。2位を占めたのは「不幸な境遇でも幸せになれること」というカテゴリーだが、これは前節で挙げられた「人間の弱さ・悲痛さと日常の脆弱さ」と表裏一体の関係にある。人間の弱さという主題そのものより、「弱くとも幸せになれる」というメッセージを読み取れる部分が読者の感動を呼んだのではないかと考えられる。

「主人公の個性・人生観」も多い。読者自身の予想や価値観を超え、読者が驚き憧れるような生き方をする主人公への感動が記されていた。この種の感動は、思春期の読者にとっての世界観の広がり、ないしロールモデルの重要性を示唆する。「喪失感とその回復」に関する回答も複数あったが、死などの人生の限界と直面した際、大きな喪失感を抱えながらも、失ったものを取り戻すのではないかたちでの何らかの回復が、読者の感動を呼び起こすことが見られた。人生の限界を「あるがまま」に受け入れる姿の尊さも、感動の喚起要因となることが示唆される。

その他、作品の主題と同様、「成長・再会」も挙げられた一方、「スリル・戦慄的な内容」に関する回答もあった。人々がしかたなく死を選んでいくといった、読者が圧倒されるような恐怖や悲痛に満ちた内容が感動した部分として挙げられている。1.1で触れたように、芸術においてはスリル・戦慄は感動と並ぶ重要な要素とされる（Konečni, 2005 ; 2011）。本調査では、スリルが文学的感動の喚起に寄与することが確認された。

上記内容は様々だが、参加者の記述に共通して見られるのは、「自分ならどうするか」という自分自身に引きつけた読みが強いことである。『銀河鉄道の夜』のような童話的作品でも「大切

な人の「死」という不条理に向き合ったとき、自分ならどうするか考えるきっかけになった」という回答があり、ジャンルに関わらず自分自身に引きつけた読みが機能することがうかがえる。

### 3.3.3 感動的な部分の表現

作品中、とくに感動した部分の表現についての自由回答は以下のように分類される。

Table 3 感動的な部分の表現

カテゴリー	サブカテゴリー	度数	%
新鮮味	対比	4	14.8
	死の描写	4	14.8
	比喻	3	11.1
	自分の存在の意味付け	3	11.1
	日常の機微から人生の深さを知る (リアリズム)	1	3.7
	情景の描写	1	3.7
	作品の構造	1	3.7
<i>overall</i>		17	63.0
複数の価値観のぶつかり合い	複数の価値観のぶつかり合い	6	22.2
諦念	諦念	2	7.4
謎解きと伏線の回収	謎解きと伏線の回収	1	3.7
違和感	身体的グロテスク	1	3.7
総数		27	100.0

感動的な部分の表現についての回答は、選択肢と自由記述によって得られた。

まず、最も多く選ばれたのは「異化」(Shklovsky, 1990)の一般的言い換えとして挙げた「新鮮味」であり、6割以上を占めた。この結果は、感動の喚起には、novelty (新奇性、新鮮味)が必要だという知見 (Menninghaus et al., 2015; 趙他, 2017) に合致する。

「新鮮味」が具体的にどのような表現で実現されたかについては、「対比」、「死の描写」、「比喻」、「自分の存在の意味付け」などに関する回答が多い。「対比」については、寒さと暖かさ、内面と外面、強さと弱さ、「くだらない自分」と「飛び越えていく他者」などの表現例が挙げられている。これらの対比(対照法)は表現を生き生きとさせるとともに、「思想に力を付与する」(Preminger & Brogan, 1993, p. 79) 効果がある。「死の描写」について言えば、死という事象は多くの若者にはまだリアリティに乏しく、逆に新鮮味を感じさせたのかもしれない。他方、「異化」のもう一つの言い換えとして選択肢に入れた「違和感」という回答は1件のみであった。表現に関わる「違和感」は感動と結びつきにくいことが示唆された。「異化」の二つの言い換えが正反対の回答数を得たことは(これらの言い換えが妥当だったかという点も含め)、今後の検討課題である。

「比喻」への注目も比較的多い。「他人の靴を履いているという言葉が用いられており、自分がその人の立場だったらどうだろうと想像することによって分かち合う能力のことをわかりやすく示している」(『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』)。直喩や隠喩(メタファー)への注目が多いが、換喩(メトニミー)に着目した回答も1件あった。「私はコンビニ店員という動物なんです」「コンビニのために存在していると思うと、ガラスの中の自分が初めて意味の

ある生き物に見えた」(『コンビニ人間』)。ここでは「動物」や「生き物」が「人間」の換喩ないし提喩として用いられているが、回答者はその効果に気づいている。

「自分の存在の意味付け」に関わる回答もあった。「自分は意味のある存在であるアイデンティティの確立は青年期の発達課題であり (Erikson, 1959)、自分という存在の意味、とくに他者との関係性におけるそれは青年にとって重要な問題である。日本の若者は世界の中で自己肯定感が低いことが一貫して示されてきた (例えば、内閣府, 2019)。それゆえ、自分の存在の意味を見出す時に、新鮮感を得、感動するのだと推察される。

次に多かったのは、「対話」(Bakhtin, 1981)の言い換えとして用いた選択肢「複数の価値観のぶつかり合い」を選んだ回答であり、全体の2割以上を占めた。挙げられた表現例を精査すると、「生と死」、「善と悪」など主題的対立との関連が強い。主題と表現の結びつきを意識した回答が多いと言える。

全体として、主題との結びつきを意識しつつ、感動的な表現・手法を挙げた回答が多い。これは言語芸術としての文学の特性を正しく理解したものと評価できるだろう。ただし、学生たちが表現と内容の結びつきに初読時から自覚的だったとは限らない。むしろ、本調査の質問項目によって表現と内容という2つのレベルの存在とその相関に意識的になったという想定もできる。つまり、「感動的な部分にどんな印象深い表現がありますか」のような問い自体が文学作品の表現への注目を引き起こした可能性である。これはこうした調査方法自体の厳密性と教育的意義の両方に関わる重要な点であり、今後の検討に委ねたい。

### 3.3.4 参加者の読書習慣

参加者たちの小学時代の読書頻度は、「毎日読んだ」は41.2%、「週1回以上」は26.5%、「月1回以上」は8.8%、「ほとんど読まなかった」が17.6%であった。同じく中学時代の読書頻度は「毎日読んだ」20.6%、「週1回以上」32.4%、「月1回以上」26.5%、「ほとんど読まなかった」14.7%である。高校時代については「毎日読んだ」5.9%、「週1回以上」23.5%、「月1回以上」32.4%、「ほとんど読まなかった」32.4%である。現在(大学時代)の読書頻度は「毎日読む」11.8%、「週1回以上」26.5%、「月1回以上」20.6%、「ほとんど読まない」35.3%である。全体としては、学年が上がるにつれ、読書頻度が下がる傾向が確認される。ただし、大学時代は高校時代より、毎日から週1回以上読書する人の数も増えており、読書習慣の両極化が見られる。

高校時代に読書の習慣から離れたという回答が目立つ。この結果は、受験勉強や部活動、SNSなど高校時代に特徴的な忙しさのためだと考えられる。その一方、3.1で報告したように、感動した文学作品として高校時代に読んだものが最も多く挙げられた。この結果は、読書頻度は、必ずしも文学的感動の喚起要因となるわけではないことを示している。一方、これは大変興味深い点でもある。忙しくて本を読む余裕もない中でも、作品に感動し、その感動を忘れずに現在に至ることは、文学的感動がいかに若い世代に影響力を持ちうるかを示唆している。

大学生になると読書習慣の二極化が生じており、文学好きな人は高校時代より頻繁に作品を読んでいる。ただし、3.1で報告したように、近代文学を挙げた回答は少数であり、大半の回答は現代文学、とくに思春期文学（Youth literature）を挙げている。

また、普段よく読む本のジャンル（複数回答可）は、純文学が最も多く（61.8%）、次は推理小説（41.2%）、ライトノベル（23.5%）であった。他には、SF 小説（14.7%）、ノンフィクション（11.8%）とエッセー（11.8%）もあった。純文学と推理小説が多いことが目立った。

#### 4. 総合考察

本節では、上述の分析結果についての総合考察を行うが、「4.1. 文学的感動の特徴」と「4.2. 本調査からうかがえる日本人大学生の読書傾向」の二つに分けて考えたい。

本調査は探索的性質のものであり、われわれの考察がどの程度の一般妥当性を持つかについては慎重でなければならない。今後、調査規模の拡大や質問項目の訂正などを伴う追加調査が必要となろう。だが、本調査の分析結果と考察は、今後の調査のための仮説ないし前提として一定の有効性を持つと期待される。

##### 4.1 文学的感動の特徴

文学的感動は、他の感動、特に実生活の出来事による感動と比較したほうが、よりその特徴を鮮明に捉えられると考えられる。以下、本研究の結果と実生活の感動の結果における違いとその考察をまとめる。

まず、文学作品に感動したときの読者の反応（研究目的1）について言えば、本調査では「涙」が最も多い（「涙が出た」「耐えられず涙を流してしまった」など）。実生活の感動でも身体反応は「涙」が最も多く、「心臓の鼓動」も多い（趙，2022）。これは二種類の感動の共通点と言えるだろう。

実生活の感動では喜びや解放感などのポジティブな感情が多く生じる一方、寂しさ、不安、悲しみなどのネガティブな感情も混在することが確認されている（趙，2022）。本調査でもそのようなポジティブとネガティブ反応の混在が示され、特に「心のざわつき」や「不眠」、「溜息」などのネガティブな反応が多く示された。主題・内容的にも、悲劇的筋立てやネガティブな結末、スリル・戦慄的内容の作品が多く挙げられている。文学作品の場合、虚構である分、ネガティブな内容とそれに相応する感情（悲痛や恐怖など）が感動を高めるという Menninghaus らの Distancing-Embracing model と一致する。今回は身体的反応のみを測定したが、今後の研究では感情反応も測定に入れる予定である。

また、感動の持続時間が実生活の感動の場合（趙，2023）より長いことも注目される。ここから文学的感動はより長期間、人間に影響を及ぼすことが推察される。

次に、感動の喚起要因（研究目的2）を見てみる。

作品の内容面について言えば、「家族愛」などの日常的な主題を扱った作品が多い。一方、作品の表現面について、ミステリーやファンタジー調の非日常設定のものが目立つ。謎や伏線を持つプロットが好まれ、「伏線回収」の巧みさに感動したという回答者が多い。このことは一見矛盾しているようだが、**家族愛という「身近な主題」と、謎や伏線を含む「ミステリー的面白さ」との結びつきが好まれる傾向**があると推測される。

「身近な主題」と「ミステリー的面白さ」の結びつきは、3.3.2で言及した「**自分ならどうするか**」という**自分自身に引きつけた読み**と関係があると考えられる。感動体験において自分自身との関連性は中心的要素であり、文学的感動においても「**自分自身に引きつけた読み**」が前景化することは不思議ではない。非日常設定に投げ込まれた主人公が家族愛のような日常的主题をめぐって悩む様子を見ることで、自分にとって身近な問題を新しい角度から見直すように読者は促される（一種の異化）。望む通りに生きられない自分、弱い自分などのネガティブな自己像を主人公たちに見出し、感情移入しながら彼らが苦しんだり克服したりする姿を見て、「あ、そういう生き方でもいいんだ」と感じることで、治療的効果も期待される。

青年期は自省・内省の強度と重要性が増す時期であり、「**自分に引きつけた読み**」は読書への関心を高める意義があると考えられる。この点は、何のために文学を読むか（Fialho, 2019）という根本的問いにつながるとともに、「**文学の感動がもたらす影響**」というわれわれのもう一つの研究関心とも関連が深い。

作品の表現面について言えば、構成上の工夫や比喩の効果に関する回答が多い。これは〈主題と表現の結びつき〉という文学の中心的契機への気づきとして評価されるだろう。ただし、その気づきは本アンケートに回答することで促された可能性もあり、文学的感動に関するふり返りそれ自体の教育的効用が期待される。

以上のように、文学的感動は実生活の感動体験と質的・機能的に似た面を持つことが確認された。また二種類の感動が自己という概念を介して関連していることが示唆された。

一方、両者の差異について言えば、一つ目には、文学的感動に含まれるネガティブな要素がより多いこと、二つ目には、当然ながら、文学的感動には言語表現や文学的手法そのものへの感動が含まれていることである。本調査では、表現の新鮮さや複数の価値観のぶつかり合いなど「異化」と「対話」に関連する表現手法が文学的感動に寄与することが示された。また、「伏線回収」の巧みさによる感動も文学的感動に固有のものと言えるだろう。これらの点は他の芸術ジャンルとの対比も交え、今後さらに調査することが必要である。

## 4.2 本調査から見られた日本人大学生の読書傾向

本調査の参加者たちは、文学の講義を受講する大学生・大学院生で、文学に関心を持つグループである。それでも目立ったのは、小学校高学年までは読書習慣があったが、中高校時代にそれが途切れてしまったという回答である。その反面、感動した作品を読んだのは高校生の時期が最も多い。このことから、読書頻度と文学的感動の有無は必ずしも一致しないということが言えそ

うである。つまり、小学時代のように読書習慣が保たれていても、その時期に文学的感動（現在まで想起されるような）が起きるとは限らない。読書の頻度は、必ずしも感動の喚起要因ではないことが示唆された。

前述したように、感動した作品は現代日本文学が大半であり、かつ思春期文学 (Youth literature) が多い。いわば高校時代が「読書習慣の空白期間」になってしまっており、近代日本文学や外国文学へのアクセスを十分に持たずに大学に入学したケースが典型的であるように思われる。

本論の冒頭でも述べたように、近年、文学作品の受容の「自己変革的 (transformative)」役割に関する経験的研究が増えている (Kuiken et al., 2004 ; Djikic et al., 2009 ; Fialho, 2019)。こうした研究の背景には、一つには若者の読書離れと言われる現象があると考えられ、社会的に文学の意義が問い直されていることがあろう。

本調査を通じて現代日本の大学生の読書傾向の一端が明らかになった。しばしば言われる「読書離れ」については、より細かい特徴づけが必要である。中高校時代の読書習慣の中断のせいで、近代日本文学や外国文学への接近が育てられていない回答者が目立った。その一方、現代日本文学、とくに思春期文学はそれなりの人気がある。こうした大学生にどのように働きかけるかは、文学教育にとって大きな問題だろう。読書習慣を取り戻させることはもちろん必要だが、それだけでなく、より多くの文学ジャンルへの関心、現代以前の文学作品への接近、日本文学および世界文学の古典<sup>カノン</sup>についての基本的知識の育成なども、文学教育にとって重要な課題である。とはいえ、若者が（近代文学より）現代文学を好んで読むことにも一定の必然性があり、彼らが現代文学に何をどのように求めているか、さらなる調査が必要である。

## 引用文献

- Bakhtin, M. (1981). *The Dialogic Imagination: Four Essays*. Edited by M. Holquist. Translated by C. Emerson and M. Holquist. Austin: University of Texas Press.
- Benedek, M., Kaernbach, C. (2011). Physiological correlates and emotional specificity of human piloerection. *Biological Psychology*, 86, 320-329.
- Cova, F., & Deonna, J. (2014). Being moved. *Philosophical Studies*, 169, 447-466.
- Djikic, M., Oatley, K., Zoeterman, S., & Peterson, B. (2009). On being moved by art: How reading fiction transforms the self. *Creativity Research Journal*, 21(1), 24-29.
- Erikson, E.H. (1959). Identity and life cycle: Selected papers. *Psychological Issues*, 1, 1-171.
- Fialho, O. (2019). What is literature for? The role of transformative reading. *Cogent Arts & Humanities*, 6, 1-16.
- Fialho, O., Zyngier, S., & Miall, D. (2011). Interpretation and Experience: Two Pedagogical Interventions Observed. *English in Education*, 40, 236-253.



- Gabriellsson, A. (2001). Emotions in strong experiences with music. In P. N. Juslin & J. A. Sloboda (Ed.), *Music and Emotion: Theory and Research* (pp. 431-452). Oxford University Press.
- Hume, D. (1757). Of tragedy. In: D. Hume (Ed.), *Four Dissertations* (pp. 185-200). Millar.
- Jakobson, R. (1990). *On Language*. L. R. Waugh & M. Monville-Burston (Ed.), Harvard University Press.
- 加藤 樹里・村田 光二 (2013) . 有限の顕現化と社会的価値の志向性が悲しみを伴った感動に及ぼす影響 心理学研究, 84, 138-145.
- 金田一京助ほか (1991) . 新明解国語辞典第4版 三省堂書店.
- Koelsch, S., Jacobs, A., Menninghaus, W., Liebal, K, Klann-Delius, G., von Scheve, C., & Gebauer, C. (2015). The quartet theory of human emotions: An integrative and neurofunctional model. *Physics of Life Reviews*, 13, 1-27.
- Konečni, V. J. (2005). The aesthetic trinity: Awe, being moved, thrills. *Bulletin of Psychology and the Arts*, 5, 27-44.
- Konečni V. J. (2011). Aesthetic trinity theory and the sublime. *Philosophy Today*, 55, 64-73.
- Kuehnast, M., Wagner, V., Wassiliwizky, E., Jacobsen, T., Menninghaus, W. (2014). Being moved: Linguistic representation and conceptual structure. *Frontiers Psychology*, 5, 1242.
- Kuiken, D., Miall, D., & Sikora, S. (2004). Forms of self-implication in literary reading. *Poetics Today*, 25(2), 171-203.
- Landmann, H., Cova, F., & Hess, U. (2019). Being moved by meaningfulness: Appraisals of surpassing internal standards elicit being moved by relationships and achievements, *Cognition and Emotion*, 33, 1387-1409.
- Madelijn, S., & Jantine van S. (2018). Against the odds: human values arising in unfavourable circumstances elicit the feeling of being moved, *Cognition and Emotion*, 32, 1231-1246.
- Menninghaus, W., Wagner, V., Hanich, J., Wassiliwizky, E., Kuehnast, M., & Jacobsen, T. (2015). Towards a psychological construct of being moved. *PLOS One*, 10, 1-33.
- Menninghaus, W., Wagner, V., Wassiliwizky, E., Jacobsen, T., & Knoop, C. (2017). The emotional and aesthetic powers of parallelistic diction. *Poetics*, 63, 47-59.
- Menninghaus, W., Wagner, V., Hanich, J., Wassiliwizky, E., Jacobsen, T., & Koelsch, S. (2017). The Distancing-Embracing model of the enjoyment of negative emotions in art reception. *Behavioral and Brain Sciences*, 40, 1-63.
- Miall, D. (2006). *Literary Reading: Empirical & Theoretical Studies*. Peter Lang.
- Miall, D., & Kuiken, D. (1994). Foregrounding, defamiliarization, and affect: Response to literary stories. *Poetics*, 22, 389-407.
- 内閣府 (2019) . 令和元年 (2019 年) 版子ども・若者白書  
[https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/pdf_index.html) (2023/5/19 最終閲覧)
- 野中進 (2022) . ロシア小説講義ノート 埼玉大学リベラルアーツ叢書.

- Preminger, A. & Brogan T.V.F. (Ed.) (1993). *The new Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*. MJF Books.
- Scherer, K.R., Zentner, M.R., & Schacht, A. (2002). Emotional states generated by music: An exploratory study of music experts. *Musicae Scientiae*, 5, 149-71.
- 新村出 (2008) . 広辞苑第 6 版 岩波書店.
- Seibt, B., Schubert, T. W., Zickfeld, J. H., Zhu, L., Arriaga, P., Simão, C., & Fiske, A. P. (2018). Kama muta: Similar emotional responses to touching videos across the United States, Norway, China, Israel, and Portugal. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 39, 55-74.
- Shklovsky, V. (1990). *Theory of Prose*. Translated by B. Sher. Normal. Dalkey Archive Press.
- Tan, E. S. H. (2009). Being moved. In D. Sander & K. R. Scherer (Ed.) , *Oxford Companion to Emotion and the Affective Sciences, Series in Affective Science* (pp. 74). Oxford University Press.
- 戸梶 亜紀彦 (2010) . 感動と心理の変容 海保博之・松原望 (監) 感情と思考の科学事典 (pp. 290-291) 朝倉書店.
- Van Schooten, E., Oostdam, R., & de Gloppe, K. (2001). Dimensions and predictors of literary response. *Journal of Literacy Research*, 33(1), 1-32.
- Wassiliwizky, E., & Menninghaus, W. (2022). The Power of Poetry. In Chatterjee, A., & Cardillo E. R., (Ed.), *Brain, Beauty, and Art: Essays Bringing Neurasthenics into Focus* (pp. 182-187). Oxford University Press.
- 趙 丹寧 (2021) . 自伝的記憶としての感動体験と体験後の変化に関する探索的検討 埼玉大学紀要 (教養学部), 57(1), 1-17.
- 趙 丹寧 (2023) . When people are moved, their Experience transcends their culture: Examining own-life experiences of being moved among Japanese, Chinese, and Germans. 埼玉大学紀要 (教養学部), 58(1), 57-77.
- 趙 丹寧・金子 楓・宝蔵 祥昌・藤 桂 (2017) . 感動体験の特徴に関する文化差の比較—承認の日本, 偶然の中国, 衝撃のドイツ— 日本心理学会第 81 回大会発表論文集, 173.
- Zyngier, S., & Fialho, O. (2010). Pedagogical stylistics, literary awareness and empowerment: a critical perspective. *Language and Literature*, 19(1), 13-33.